

巻・頭・言

いよいよ開幕！ ～大阪・関西万国博覧会～

先の 4 月 13 日から 2025 年日本国際博覧会(略称「大阪・関西万博」)が開幕いたしました。大阪市の大阪北港の一角である人工島夢洲(面積 390ha)を会場とし、期間は 10 月 13 日までの 184 日間としています。島内北部では統合型リゾートである大阪 IR が 2030 年度の完成を目処に建設が進められており、2025 年 1 月には島内中央部で大阪メトロ中央線夢洲駅が開業するなど、大阪の新たな国際観光・国際交流拠点として整備が進められているところです。大阪・関西万博はこの中の 155ha(東京ドーム約 33 個分)を利用し、158 カ国・地域、9 つの国際機関、13 の民間企業・団体が出展し、我が国では 2005 年の愛知万博から 20 年ぶりに、国際博覧会条約に基づき BIE(博覧会国際事務局、本部フランス・パリ)に認定された国際博覧会(区分：登録博覧会)です。

我が国で初めて開催された国際博覧会は 1970 年(昭和 45 年)の大阪万博ですが、その当時私は会場(大阪府吹田市千里丘)へ電車で 1.5 時間ほどの兵庫県芦屋市に住んでいました。我が国での初めてかつ関西圏での開催でありましたので、子供ながらにその盛況ぶりは直接肌で感じていました。中でもテーマ館の一部として建造され、同博覧会のシンボルであった岡本太郎氏作の「太陽の塔」(2020 年、国の登録有形文化財に登録)やアメリカ館での月面探査機アポロ 8 号の司令塔、アポロ 12 号が持ち帰った月の石、ソ連館の宇宙船ソユーズの実物展示などが大きな話題となり、連日 4 時間以上の待ち時間となる長蛇の列ができていた様子などが記憶に残っています。さらにこれら当時の盛況ぶりについて

橘 邦彦(たちばな くにひこ)

技術士(建設/総合技術監理部門)

日本技術士会北海道本部
地方委員会(オホーツク技術士委員会)
代表



では、その来場者数が 2010 年上海万博の約 7306 万人に次いで歴代 2 位の約 6422 万人であり、日平均で約 35 万人の入場者があったことから、愛知万博の来場者数 2205 万人、日平均約 12 万人と比べても当時はどれほどの関心があったか感じ取ることができます。今回開催されている大阪・関西万博での想定している来場者数は 2820 万人、日平均 15 万人とされているようですが、GW 最終日(5 月 6 日)段階では約 246 万人、日平均約 10 万人弱とやや苦戦しているようです。会期後半にこの人数が増えるとの予測もありますので、最終的にはどのような数字になるか興味のあるところです。

今回の万博では「いのち輝く未来社会のデザイン」をメインテーマに未来社会の実験場として位置づけられ、持続可能な開発目標(SDGs)の目標年 2030 年まで残り 5 年となる中、その実現への貢献を目指すとともに、日本の国家戦略 Society5.0 の実現に向け、空飛ぶクルマ、リアルとバーチャルが融合した数々の未来システムなどイノベティブなアイデアへの取組が展開されています。さらには広く様々な国や人に新しい文化や技術を紹介し、将来の展望を示すことや人類が築き上げてきたその時代の技術・芸術の頂点を世界に向かって発信する交流の機会とされています。このようなことから、技術者の一人として、世界中の文化、芸術、さらには最先端技術に触れることができる機会として大いに興味を感じています。北海道から離れた地での開催のためか私の周辺では関心を持つ人が少ないようですが、今後その盛況の成り行きに注目して行きたいと思います。皆さんはどのように思っていますか。